



尾家祐二
九州工業大学

Yuji OIE [正会員] oie@cse.kyutech.ac.jp

1980年京都大学大学院修了。工学博士。日本電装（現デンソー）、佐世保高専、九州工業大学、奈良先端大教授、1997年九工大教授、同理事・副学長を経て、2016年より学長。専門は情報ネットワーク工学。



[No.98]

未来のIT技術者、研究者へ

これまでの多くの事柄について、未来予測は困難を極め、情報分野におけるコンピュータもインターネットも、登場したときに、専門家さえ、その未来に共感できていたわけではない。私が大学院の学生であったとき、幸いにも、パケット交換方式、ARPANET関連の論文などから当時の最新事情に触れることができたが、もちろんのこと、インターネットもLANもなく、今のようなネットワーク環境を想像することはできなかった。しかし一方で、^{けいがん}慧眼の持ち主もあり、感受性豊かな人もいるのである。

たとえば、いまを遡ること140年前の鎖国から開国して間もない日本において、福沢諭吉は『民情一新』（明治12年（1879年））を著し、「蒸気船車、電信、印刷、郵便の四者は1800年代の発明工夫にして、社会の心情を変動するの利器なり」と述べ、新たな技術や交通、通信システムが人々の心情を一変させる力があることを指摘している。さらに、「智極まりて勇生ず」という言葉を取り上げ、智慧だけでなく、見聞を広くして事物の有様を知ることの重要性を述べ、英語の「インフラルメーション」という言葉も紹介し、早くもこの時期に、情報の価値を指摘している。鉄道についても、新聞などを運ぶ、すなわち情報を運ぶ手段としても注目している点が興味深い。

一方、ネットワークについては、それが普及した今日、その威力を改めて感じることは困難かもしれないが、その発達によって、明らかにさまざまなものが質的に変化してきた。雑誌『WIRED』の創刊編集長を務めたKevin Kellyはその著『＜インターネット＞の次に来るもの』（NHK出版刊）において「1981年になって、ジョージア大学の科学関係の研究室で働くことになり、そこでアップルIIというコンピュータに触れるチャンスがあった。……すごい機能があったが、本物ではなかった」と述べ、「今振り返ってみると、コンピュータの時代は、それが電話に繋がれるまで、本格的に始まって

いなかったのだ」とコンピュータとネットワークの出会いの衝撃を著している。ネットワークに繋がることによって、繋がったものが質的に変化してしまうこと、または変化の兆しを、すぐに感じ取ることは難しかったであろうが、振り返ってでも、その質的变化を感じ取れる能力は、未来を見る目を養うであろう。

未来に目をやると、グローバル化は一層進み、社会的要求は多様化し、変化し続ける中で、課題は複雑になることであろう。そして、学術の進展も著しく、新たに利用可能な技術も数多く生み出され、それらの潜在的な能力や機能、そしてそれらが発揮された世界を想像する力とその世界に共感する感受性は、一層重要になる。これまでの科学技術の成果は、知的好奇心による活動に端を発している場合が多いことが指摘されているが、それらが活かされるためには、さまざまな制約条件下において、ある意味で最適な解を見出そうという努力や、制約条件を緩和する、撤廃するための努力等が寄与している。今後は、そもそも、何を目標すべきかを考えたり、多様な要求を同時に最大限に満たすべき課題を考えたり、さらには変化し続ける状況や要求に柔軟に対応する方法やシステムを考案するときなど、技術力だけでなく、想像力、判断力、価値観などが必要になる。“The Future of Jobs” World Economic Forum, 2016においても、複雑な課題に取り組む未来の技術者には、システム分析力とともに判断力、決断力も期待されることが指摘されている。

これからのIT分野の人たちにとっては、ITが実現する世界を想像する力、その世界を実現したいと思ひ、試し続ける意志が大きな力になると思う。多様な人たち、組織との間で相互作用を生じさせるさまざまな活動を通して、人がそれぞれの立場で生き生きとして暮らす未来を構築することに貢献してほしい。

(2018年11月14日受付)